

ヘーゲル「法・権利の哲学」第2回講義の国家論

——1818/19年・冬学期（ベルリン大学）——

福吉勝男

〔1〕ヘーゲル生前の公刊著作とヘーゲル全集の特徴

ヘーゲルが生前に公刊した主な著作は次の四つである。

- (1)『精神現象学』(*Phänomenologie des Geistes*, 1807)
- (2)『論理学』(*Wissenschaft der Logik*, 1812-16)
- (3)『哲学的諸学のエンツィクロペディー』(*Enzyklopädie der Philosophischen Wissenschaften*, 1817)
- (4)『法・権利の哲学要綱』(*Grundlinien der Philosophie des Rechts*, 1820)

しかしながら、ヘーゲル全集——最初のもの「アカデミー版ヘーゲル大全集」＝ベルリン版、その後グロクナー版、ラッソン版、ホフマイスター版、ズールカンプ版そして新全集版——には、先の四つの著作以外にも多くのものが含まれている。これらはヘーゲルの死後、ヘーゲルの弟子たちや息子カールがヘーゲルの遺稿と聴講学生のノートから講義録を編纂して、公刊された著作と合体しまとめられたものである。もし編者たちによる誤り、意識的な何らかの理由による改竄などがあるとどうなるであろうか。ヘーゲル像の見直しにもつながる重要事になるであろう。

〔2〕講義筆記録の整理刊行

まず行なわねばならないのは、ヘーゲルの自筆稿があればそれを、そして講義筆記録そのものを分析し、考察することである。近年、新たに発見された講義筆記録が編集され、またすでに存在の確認されていたものも新たに編集されて刊行されてきている。それらが、《Hegel, *Vorlesungen. Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*》（ヘーゲル講義録選集）⁽¹⁾として刊行されてきている。

各巻の内容は次のとおりである。

Band 1: *Vorlesungen über Naturrecht und Staatswissenschaft*, Heidelberg 1817/18 mit Nachträgen aus der Vorlesung 1818/19 Nachgeschrieben von P. Wannenmann.

Band 2: *Vorlesungen über die Philosophie der Kunst*, Berlin 1823 Nachgeschrieben von H. G. Hotho.

Band 3-5: *Vorlesungen über die Philosophie der Religion*.

Band 6-9: *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*.

- Band 10: *Vorlesungen über die Logik*, Berlin 1831 Nachschrift von K. Hegel.
- Band 11: *Vorlesungen über Logik und Metaphysik*, Heidelberg 1817 Mitgeschrieben von F. A. Good.
- Band 12: *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*. Berlin 1822/23 Nachschriften von K. G. J. von Griesheim, H. G. Hotho und F. C. H. V. von Kehler.
- Band 13: *Vorlesungen über die Philosophie des Geistes*, Berlin 1827/28 Nachgeschrieben von J. E. Erdmann und F. Walter.

〔3〕「法・権利の哲学」講義の状況

先にみた、美学・歴史哲学・哲学史・精神哲学・法・権利の哲学などの多くの講義筆記録のうち、私は特に「法・権利の哲学」関係のものに注目している。これに関する講義筆記録は全7回分すべて残存し発見されて、丁寧に校訂編集されて公刊されている²⁾。その内容は次のようである。

- (1) 第1回講義 (1817/18年・冬学期、ハイデルベルク大学)
- (2) 第2回講義 (1818/19年・冬学期、ベルリン大学)
- (3) 第3回講義 (1819/20年・冬学期、ベルリン大学)
- (4) 第4回講義 (1821/22年・冬学期、ベルリン大学)
- (5) 第5回講義 (1822/23年・冬学期、ベルリン大学)
- (6) 第6回講義 (1824/25年・冬学期、ベルリン大学)
- (7) 第7回講義 (1831年　・冬学期、ベルリン大学)

このうちの第2回講義筆記録 (1818/19年・冬学期、ベルリン大学) を、今回〔4〕以下で検討する。

なお、近年の研究成果として、各学期ごとの講義テーマ、講義時間、講義回数(週)、講義時間、聴講生数、などについてもその詳細が判明し、報告されている。「法・権利の哲学」関係だけに限ってみても、それは次のようである³⁾。

学 期	講義時間帯	回数(週)	講 義 期 間	聴講生数
①1817/18年冬	10-11	6		
②1818/19年冬	16-17	5	18年10/22 ～19年3/25	62
③1819/20年冬	17-18	5	19年10/25 ～20年3/18	53
④1821/22年冬	16-17	5	21年10/25 ～22年3/23	56
⑤1822/23年冬	17-18	5	22年10/30 ～23年3/20	20
⑥1824/25年冬	12-13	5	24年10/27 ～25年3/24	57
⑦1830/31年冬	12-13	5	30年11月10日、 11日の2回講義 した(11月14日 死亡)	不明

[4] 1818/19年「法・権利の哲学」講義（ベルリン大学）の意義

この法・権利の哲学に関する講義は、ベルリン大学における1回目の講義である。しかし、ベルリン大学赴任前のハイデルベルク大学において当該テーマで講義を行なっているから、同一テーマでの講義順でいえば1819/19年のものは第2回講義にあたる。

したがって、本講義を考察する場合に重要なことは、ハイデルベルク大学における第1回講義や、ベルリン大学における2回目の講義——全体の順番では第3回講義——、また1820年末刊行の『法・権利の哲学』と内容上の比較をすることである。その理由は次のようである。

- (1) ヘーゲルは1818年10月にベルリン大学に赴任してきているが、それ以前2年間勤務したハイデルベルク大学に赴任するさい（1816年）、ベルリン大学からも勧誘されており、この時は赴任をことわっている。2年後に赴任を決断した理由を理解する手掛かりに本講義の内容がなるかもしれない。
- (2) 1819年3月26日付けで、ヘーゲルは友人のニートハンマーに宛てて次のような書簡を出している——「教授として私は仕事を始めたばかりです。私自身のことでも本分の仕事（Sache）においてもなさねばならないことがまだ多く残っています。……ライプツィヒの見本市までに私はさらに一冊本を（私の自然法・権Naturrechtをパラグラフに区切って）書かねばなりません」⁴⁰。これは明らかに、1820年末に刊行された著作の予告に他ならない。問題になるのは、ライプツィヒの見本市までに書き刊行するとの予告が結局は1年半ほど遅れてしまった理由は何かということである。刊行が遅延になっている間に内容上の変更が生じていないだろうか。生じていれば、それはどのようなものか。1818/19年講義の内容はこの問題に関わる。
- (3) 上記（2）の点は、1819年春頃からの、ザント事件、デマゴグ狩り、ブルシェンシャフト弾圧、カールスバート決議、言論・出版弾圧、検閲の強化などの当時の厳しい社会的政治的現実の進行を背景にしていることと深く関わっているように思われる。この点の解明と意味づけが重要である。

ここでは、1818/19年講義の第Ⅲ部「倫理」（Sittlichkeit）の「3．国家」中の＜国内公法＞（das innere Staatsrecht）の概要をみることにする。その理由は次の点にある。第1には、＜国内公法＞の部分が数回の講義（録）の中で最も量的に大きな変化を受けた個所の一つだからである。第2には、＜国内公法＞の部分が憲法・国家体制、国家権力（君主権、統治権、立法権）の機能や権限、選挙および議会のあり方等に関して叙述されており、最も政治的な事柄を扱っているからである。当時の政治のあり方、政治的社会的状況と関係が深く論じられていると思われるからである。

[5] 「1818/19年講義」の全体構成

本講義（録）の全体構成と、検討対象の「3．国家」中の＜a．国内公法＞部分の節題（内容

を考慮して本講義録を編集したK. -H. Iltingがつけたもの)を、まず参考のために紹介しておきたい⁹⁾。

Inhalt

Einleitung (序論)(§ § 1-16)

I . Das abstrakte Recht (抽象的法・権利)(§ § 17-20)

1 . Besitz und Eigentum (占有と所有)(§ § 21-37)

2 . Der Vertrag (契約)(§ § 38-42)

3 . Das Unrecht (不法)(§ § 43-57)

II . Die Moralität (道徳)(§ § 58-60)

1 . Die Handlung und der Vorsatz (行為と企図)(§ § 61-64)

2 . Das Wohl und die Absicht (福祉と意図)(§ § 65-68)

3 . Das Gute und das Gewissen (善と良心)(§ § 69-73)

III . Die Sittlichkeit (倫理)(§ § 74-77)

1 . Die Familie (家族)(§ § 78-79)

a . Die Ehe (婚姻)(§ § 80-83)

b . Eigentum der Familie (家族の所有)(§ § 84-86)

c . Erziehung der Kinder und Auflösung der Familie (子供の教育と家族の解体)(§ § 87-89)

2 . Die bürgerliche Gesellschaft (市民社会)(§ § 90-92)

a . System des Bedürfnisses und Mittel der Befriedigung (欲求の体系と充足の手段)(§ § 93-103)

b . Die Rechtspflege (司法活動)(§ § 104-111)

c . Die Polizei (公共政策)(§ § 112-113)

3 . Der Staat (国家)(§ § 114-115)

a . Das innere Staatsrecht (国内公法)(§ § 116-129)

・第116節「国家における自由の実現」

・第117節「諸個人にとって外面的威力としての、また諸個人の内在的な目的としての国家」

・第118節「国家の有機組織としての憲法・国制」

・第119節「国家における大衆の組織」

・第120節「国家における個人の自由権の実現」

・第121節「三つの国家権力」

α . Die fürstliche Gewalt (君主権)(§ § 122-123)

・第122節「君主的原理：人格としての国家の人格性」

・第123節「君主の統治行為」

β. Die Regierungsgewalt (統治権)(§ 124)

- ・第124節「統治・政府の機構」

γ. Die gesetzgebende Gewalt (立法権)(§ § 125-129)

- ・第125節「立法権における議会の国政的機能」
- ・第126節「議会とその構成員」
- ・第127節「二院制：1. 貴族院」
- ・第128節「2. 衆議院」
- ・第129節「政治的陶冶の手段としての議会の公開」

b. Das äußere Staatsrecht (国際公法)(§ § 130-134)

c. Die Weltgeschichte (世界史)(§ § 135-142)

[6]「1818/19年講義」第Ⅲ部「倫理」、「3 国家」<a. 国内公法>の邦訳

先に[5]で確認したように、「1818/19年講義」の第Ⅲ部「倫理」は、「1 家族」→「2 市民社会」→「3 国家」へと展開していき、そして「3 国家」は<a. 国内公法>、<b. 国際公法>、<c. 世界史>に区分される。ここでは、ヘーゲルの国家観をみる上で最も重要である<a. 国内公法>の箇所を邦訳——我が国にはまだ全訳がなく、日本語で読み理解することの意義が大きいのと考えるので、本文はすべて訳し、補注は本文と直接関係のある部分だけを抄訳する——し、内容の理解に努めたい¹⁰⁾。

3. 国家

a. 国内公法

第116節「国家における自由の実現」

国家は具体的自由の現実性であるが、その具体的自由は人格的個性性と特殊性が余すところなく発展して、それらの権利がそれ自身として独立に承認されるときに、またそれらが一面では、おのれ自身を通して普遍的なものの利益に変わり、他面では、みずから了承し同意してこの普遍的なものを承認し、そしてこの普遍的なもののためにはたらくということにある。その結果、普遍的なものは諸個人の特殊的な利益や知と意志のはたらきをぬきにしては貫徹されないし、私的人格もまたたんに特殊的な利益や知と意志のなかで、それらのために生きるのではなく、同時に普遍的なもののなかで、普遍的なもののために意志し、そしてそれを自覚して活動するのである。

第117節「諸個人にとって外面的威力としての、また諸個人の内在的目的としての国家」

家族、私的権利および私的福祉の諸圏に対して、国家は外面的必然性であり、それら諸圏における国家の外面的必然性の正当性は平等性として規定される。諸圏の法律は、一面では国家の本性に従属し、依存している。しかしながら、国家は自由を諸圏の実在性のうちに含んでいるのであり、そして国家はおのれの強さを、これら諸圏が独立して国家のうちに展開しているかぎりでのみもっている。そして諸圏の特殊的な諸利益は、それらが同時に独特の、国家によって承認さ

れた権利であるかぎりでのみ、国家に対する義務をもつ。

（補注：……略……国家においては、義務と権利は同一である。普遍的なものにおいては、私にとって妥当しているものが、また私の固有の自由であり、私自身の意欲でなければならない。国家はたんに一切を支配する法律であるのではなくて、自由な者としての私がそこにおいて承認されていなければならないのである。）

第118節〔国家の有機組織としての憲法・国制〕

自由の現実性がそこで把握される両極が、国家の心指し（*Gesinnung*）と国家の機構とである。自由の真の現実性は、しかしながら国家の有機組織であり、つまり国家の有機組織の内的必然性であり、具体的な諸状態への国家の区別であり、したがって自由意志（恣意）から免れた抽象的な諸職務である。それゆえ、理念によって規定された諸々の仕事や諸々の関心から、普遍的な関心や仕事、したがってまた普遍的な心指しが結果する、——こうしたことが憲法・国制（*die Verfassung*）である。

（補注：略）

第119節〔国家における大衆の組織〕

国家の精神は、次のようにみずからを分かち。

1. その有限性へと、すなわち家族生活と市民社会の圏へと分かち、そしてそれらに諸個人——多数の衆——の一部を配当する。なぜなら、その自由は特殊な意志によって媒介されたものとしてのみ実在的であり、現実的であるからである。したがって、これら諸圏は一面では普遍性を自分自身のうちに受け入れ、他面では普遍的な目的におけるものとして根拠づけられ、また資格づけられたりする。そして、これら諸圏は普遍的な目的をみずからの実体として承認し、しかも実証する。

（補注：略）

第120節〔国家における個人の自由権の実現〕

自由な全体物の保証と現実性はそれ故、人格と所有の自由の諸制度のうちにある。すなわち、公的な諸法律、仲裁的、同等身分的、公開的裁判という制度のうちに、さらには市民社会の特殊な領域、ならびに職業団体における諸共同体や地方公共団体の全共同生活の個別諸領域の枠のうちにある。この職業団体は、独立した権利をもってみずからの固有の利益と資産を管理し、そして諸個人に直接、普遍的な職務を提供するのである。

（補注：自由な全体物が現存するということは、次のことに属する。すなわち、現実的な自己意識が無限性と自由としてのみずからの特殊性のうちにあるということである。ここに自由な憲法・国制、つまり元首と国民との間の立場に対する保証が存する。議会的憲法・国制だけがその保証を与えるわけではなく、その憲法・国制は実現した自由の一契機にすぎないのである。

（フィヒテの国家最高監督官制Ephorat——国権停止Interdikt.）諸個人の自由はいかなる個別的なものであってもならず、それは職業団体において示され、代表されねばならない。諸規定には次のことが属する。

1. 人格の自由、
2. 所有の自由（フランス人は革命によって後者・所有の自由をすばやく闘い取り、ナポレオン法典によって実証した）、
3. 公開の判決 *de quur supra*.

事柄の共通なものは概念からみて何であるかということは、そのためにすべての成員がはたらく共通なものとしてもまた現存する。人間は、彼がみずからの特殊な目的を普遍的な目的へと高め、普遍的な目的のために活動的でありえるかぎりでのみ、理性的で、精神的である。専制政治は絶えず共通性を破壊しようとする。都市の高官たちはみずからの仕事を少なくとも我慢しながら良くしようとするだろう。一方、上級官庁はたびたび無知から誤解をなすだろう。共同体はそれだけで強い。多数の諸個人としての国民は何か無規定なもの、無秩序なものでしかない。）

第121節 [三つの国家権力]

2. 普遍的な業務として対自的であり、特殊的な領域において目的であるような普遍的なものは、思惟された普遍的なものそのものと区分される。まずは法律へ、ついで特殊な諸々の場合のそのもとへの包摂へ、そして最後の意志決定として主観性へと区分される。個々の契機は権力の対自的に具体的な体系としてあるのであるが、この場合の権力はしたがって、三つの全ての契機をみずからに含んでいる。こうした個々の契機は、同時に他の契機との一体性へと向かう。それら [三つの契機・権力] は君主権、統治権および立法権であって、これらはその一体性において立憲君主制を形成する。

（補注：憲法・国制は作られるものではなく、みずから作るものであり、神からの贈物である。憲法・国制がいかに現実的になるかの外的な方法は、歴史的に非常に様々である。

君主制は、家父長的な形式の直接的な反映として最初の形式である。貴族制は第2の形式であり、そして民主制は人格的自由の自己意識の開始である。貴族制はある人種の、つまり英雄たちの自然的な崇高・高貴さの原理をもっている。この貴族制は古代人にあって、君主制の場合と同様に宗教的に基礎づけられていた。貴族制は諸々の憲法・国制のなかで最も悪いものである。貴族制は一族の腐敗や私的目的を強め、また不信と過酷さをうみだす。民主制は、すべての権力をまだみずからに結びつけている。それゆえ、それは現実的な理念のどんな像でもない。民主制は小さな国民のもとでのみふさわしいのであって、したがって習俗に基づいている。習俗においては、普遍的なものと特殊なものとの利害・関心はまだ分裂していない。分裂が生じると、習俗の腐敗、私的情熱が前面に出てくる。そして民主制は習俗・倫理喪失によって滅亡する。

理性的な憲法・国制においては、特殊性はみずからを形成する余地をもっている。しかし、それは絶えず普遍的な目的のためである。民主制において習俗・倫理喪失 [の原因] になる個別性の原理は、立憲君主制そのものにおいては倫理の原理になるのである。立憲君主制は理性性の理念である。……以下略……)

α. 君主権

第122節〔君主の原理：人格としての国家の人格性〕

君主権の概念規定は、国家という全体的なものが現実的な一なるものであるということをも構成する。意志の抽象的な自己、自己自身の主観的確信、これらにおいて最終的決定がただ個人的なものとしてのみあり、したがって数量的な一なるものとしてのある個人に——君主に——帰着する。君主はあの最後の、それゆえ直接的な個性として、直接的な、したがって自然的な方法で、つまり生まれによって規定されている。

（補注：……略……国家は、一つの個体的頂点をもっている一なるものとしてあらねばならない。このものは二つの自立した最高の権力をもつことはできない（フランス革命）。君主権において個性は支配的規定である。君主権によって国民は一つの国民になる。国民としての国民は他の国民に対してたんなる個別的なものであるが、しかしみずから自身のうちにないのである。個体としての君主においてみずからを完成し、先鋭化するということは、君主の特徴とみなされうる。空虚な最終的決定を君主権がなす。諸根拠に基づいてなされる客観的決定についてはまだ問題になっていない。……以下略……）

第123節〔君主の統治行為〕

君主権に含まれた他の契機は、審議職である。この審議職は、客観的なもの、内容および諸根拠を君主へともたらし、ある場合には内閣がもろもろの国事の決定と遂行のために、ある場合にはそれと結びついた枢密院が法律の審議と準備のために行なうものである。客観的なものと、個体としての人格的な君主の形式的な意志における主観性とのこの区別によって、内閣だけが統治行為に責任があるのであって、これに対して君主には一切の責任が免除されている。

（補注：立憲的国家においては、君主の人格性はそれほど重要ではない。なぜなら、統治における客観的側面、審理の側面は君主から分離されているからである。君主ではなくて大臣が責任を負うということによって、恣意が減ぜられている。なぜなら、君主が命じるものは大臣によって署名されていなければならないからである。……以下略……）

β．統治権

第124節〔統治・政府の機構〕

統治権は普遍的なものを特殊的諸圏において主張し、そしてこれら特殊的諸圏を普遍的なものへと連れ戻さなければならず、また普遍的目的のための諸業務に配慮しなければならない。このことを内閣は協議体的な上級諸官庁および個々の官吏を通して実行する。官吏の客観的側面、その資格・適性は統治権によって審査されるが、主観的側面はしかしながら一身上の任命として君主権に帰せられる。統治権の職務に関わる人は職業団体の幹部とともに国家において中間階層を構成する。そして、その中間階層に国民の知性と教養ある自己意識がはいるのである。

（補注：……略……官吏の終身任命。中間階層：この階層はみずからを孤立・隔離してはならず、国民からも政府からも疎遠になってはならない。特別の徹底的な形成を求める諸制度によって、例えば法制度によって後者・政府は成り立つ。）

γ. 立法権

第125節 [立法権における議会の国政的機能]

立法権は、決定するものとしての君主要素と、全体についての展望と知識とをもって審議するものとしての統治権とを含んでいる。そして立法権は特に議会的要素を含んでいるのであって、これによって最も普遍的な要件であるものがたんに即自的にだけではなく対自的にも、すなわち公衆の信頼と意識でもって規定され、そして普遍的なものの意志が普遍的で実体的な仕方では生じる。

（補注：立法権における各々の決定は君主権に帰せられる。審議は内閣に属する。大臣は議会への参加者を説明者、解説者として送り出す。第3の要素：議会的、民主主義的要素。……略……立法権はたんに憲法・国制をもつのではなく、最も普遍的な統治諸要件を対象にする。そうすることによって憲法・国制はより詳細に規定され、そして仕上げられる。

第126節 [議会とその構成員]

議会は、一方では君主権と統治権との間の、他方では特殊的な諸圏と個々の市民とに解体した国民間の媒介機関をなす。議会の構成員の保証する特質は、一面では独立した能力のうちにあり、この能力と市民秩序の合法性と維持のための利害・関心とが結びつけられている。その特質は、他面では業務執行・管理によって得られ、また行為によって示された公益のための才能・技能および知識と、それによって形成された国家の官公庁的意義とのうちにある。

（補注：議会の関心は、一面では市民の関心であり、他面では市民の特殊な関心および市民の利己心に対する普遍的な関心である。議会の心指しにたいする保証は、選挙する人々のたんなる信頼や主観的な見解・意見に委ねられえない。客観的な保証、能力および才能・技能がしがたが必要なのである。）

第127節 [二院制：1. 貴族院]

議会において、さらに国民がまずもって政府に直接対立してあらわれる。議会はしかしながら本質的に、みずからにおいて有機的な市民生活に由来する。この市民生活は、土地所有と、他者の欲求および固有の主観性によって条件づけられた資産という二つの基礎をもっている。国家資産や〔国家の〕恩恵から、また商工業からも、並びに所有者の恣意からも独立せられ、そして譲渡しえない世襲財産へと高められている前者・土地所有は、特殊な利害と君主権を抑制し、媒介する基礎を形成する。このことが議会の一方の院の原理を構成する。

（補注：二院にあっては、多数決による決定が偶然性にさらされるのが少ない。媒介する要素は議会自身から生じる（国民と政府との間の）。ボナパルトは元老院senat conservateurを、彼がそれに給料を与えるということによって彼の道具にした。議会〔の構成員〕はいかなる俸給ももってはならず、統治権および国民から独立していなければならない。政府・統治は国民の精神に先立つのではなく、それに従わなければならない。）

第128節 [2. 衆議院]

第2の院は、市民たちによって選ばれた代議士たちにおいて、市民社会の動的側面を含んでいる。……それ「市民による代議士選挙」によって、とにかく現前する、そしてこうして政治的連関へ入る職業団体に選挙の権利を委ね、しかも議会の存在が本来的に立憲的な保証をもつのである。

（補注：選挙する人たちは個々の個人としてあらわれてはならない。）

第129節「政治的陶冶の手段としての議会の公開」

世論。もろもろの国事についての一般大衆の洞察と発言は、議会の公開によってその確かな基礎と真の方向性を獲得する。同時に、まさにそこから悪い判断の非重要性および政府や公人たちの冷淡さ・無関心がこれに対して明らかになる。

（補注：世論は言論・出版の自由と直接関係する。議会は世論の陶冶手段であり、したがってまた議会は公開でなければならない。公開なしには人々は国家ともろもろの国事とを知ることができない。さもないと、あてどもない、あるいは一般的なむだ話としてなにものも生じない。言論・出版の自由は参加の代用品である。重要点は次のことである。1. 発言する権利が成立するということ。2. 普遍的な諸原則が普遍的認識へ達するということ。世論は思い違いしたり、そのかされたりはしえない。政府と議会は世論を重視も軽蔑もしえるにちがいない。政治的な授業は主に議会を通して行われるのである。）

〔7〕「1818／19年講義」の内容上の特徴と検討課題

第116節から第129節までの〈a. 国内公法〉にみられるヘーゲルの国家観の特徴をまとめると次のようである。

第1には、「国家は具体的自由の現実性である」（第116節）といわれるように、国家において人間の自由が具体的に実現するとされる点である。この国家における個々人の自由の実現という場合留意しておくべきは、国家に個々人の特殊性や権利がからめとられ消失してしまうのではなく、むしろそれらが「独立に承認される」とともに、個々人の特殊的な利益を超えて「普遍的なもののために意志し」（第116節）、その実現のために活動するということである。

第2には、第1で確認された国家における自由の実現ということを個人的自由権に中心をおいてみると、それは「人格と所有の自由」（第120節）の実現にはかならず、その実現を保証する諸制度の確保が重視されている点である。その諸制度の確保は、まずは構成員すべてに妥当する公的な諸法律の確定、また諸々の権利侵害や紛争にさいしての裁判制度の樹立などをはじめとして、市民社会の諸領域、「職業団体」や「地方公共団体」における人々の生活の全領域においてなされている必要がある。

第3には、「具体的自由」を実現し、「人格と所有の自由」を確保するために国家機構が詳細に構想されている点である。その最も大きな特徴は、君主権・統治権・立法権の三つの国家権力の分立と、それら三権力の独特の一体性において成立する政治・統治形態としての「立憲君主制」（第121節）の主張にある。

第4には、立憲君主制においては三つの国家権力のうちの君主権に権力が集中しているように一見みえるが、そうではなくてむしろ統治権が強調されている点である。ヘーゲルがいう——「内閣だけが統治行為に責任があるのであって、これに対して君主には一切の責任が免除されている」(第123節)。またヘーゲルは、立憲的国家における統治において君主の恣意性をできるだけ減じ、客観性を確保するために「君主ではなくて大臣が責任を負うということ」、そして「君主が命じるものは大臣によって署名されていなければならない」(第123節補注)ことを確認している。

第5には、先の統治権よりもさらに立法権が重視されており、一見するところ立法権が最高位に位置づけられているように思える点である。それは、立法権は「決定するものとしての君主制要素」と、「審議するものとしての統治権」(第125節)とを含んでいるとヘーゲルが述べている点にみてとることができる。この関連で注目しておかねばならないのは、ヘーゲルが立法権に含まれる「議会的要素」と、この議会のあり方が「民主主義」(第125節補注)と関係していると考えている点である。議会の構成としては貴族院と衆議院の二院制を考え、このうちの衆議院を「市民たちによって選ばれた代議士たちにおいて、市民社会の動的側面を含んでいる」(第128節)として重視する。そして市民による代議士の選挙というように「選挙」の積極的意義づけを行なう。さらに、「議会の公開」(第129節)の必要性について述べ、これは国民の政治的陶冶手段として必須のものであるとし、また国民の全うな世論形成に「言論・出版の自由」(第129節補注)が必要であるとして、ともに健全な民主主義のセンスの形成に不可欠なものであることをヘーゲルは強調する。

以上のように、ベルリン大学における「1818/19年講義」にみられるヘーゲルの国家観の特徴を5点にわたって指摘したが、それらの内容は前年にハイデルベルク大学で行なわれた第1回講義(「1817/18年講義」)におけるものとはほとんど変化がないように思う。すなわち、ヘーゲルは「具体的自由の現実性」と把握される国家の基本的機構を三権の分立のもとでおさえ、さらにはこの三権のうち君主権に最高性をあたえつつも、それを形式的なものと考え、実質的にはむしろ統治権や立法権を重視したのである。さらには、立法権を成り立たせる議会の議員の選挙、議会の公開、また言論・出版の自由などはなによりも重要だと主張したのは先に指摘したとうりである。これらとほぼ同一内容のものをヘーゲルはすでに「1817/18年講義」において述べていることについては、私は拙著『ヘーゲルに還る——市民社会から国家へ』(中公新書、1999年)において指摘し、考察しておいたので参照していただきたい。

このように、今回検討した「1818/19年講義」と、この前年の「1817/18年講義」、両者における国家観にはほとんど相違がないとなると、両者間に関しては検討すべき問題は何もないように思われる。確かに、今後直ちに検討しなければならない課題として、両者間の相違に係る問題よりも、次の点を指摘することができる。第1に、1819/20年の第3回講義を検討し、その内容とこれまでの第1回および第2回講義のものと比較することである。もし第3回講義と第1回・第2回講義との間に相違があるのであれば、それはどのようなものであり、何を意味しているの

か明らかにしなければならないであろう。第2に、これら三つの講義録と、三つの講義の後にヘーゲル自身が刊行した1820年『法・権利の哲学』とを比較し検討することである。

これら二つのことは、「1817年／18年講義」（第1回講義）→「1818年／19年講義」（第2回講義）→「1819年／20年講義」（第3回講義）→『法・権利の哲学』（1820年）への展開からみて当然行わねばならない事柄である。しかしながら、私がここで第1回および第2回講義をとうしても（場合によれば1820年著作までの全体を貫くかもしれない）検討すべき重要な事柄を指摘しておきたい。それはヘーゲルが強調する「立憲君主制」の意義づけについてである。

統治権や立法権を重視し、憲法体制を重んじつつ、そのもとでの君主制（立憲君主制）、あるいはそういう統治・政治形態を有する国家が「展開した理性の像であり現実性」（第1回講義、第170節）である、「理性性の理念」（第2回講義、第121節補注）であるというように、ヘーゲルが立憲君主制に最高の意義を与えていることの理由、歴史的背景、政治的影響、現代への意味などについて今後検討することが最も重要な事柄であると私は考えている。その理由はこうである。立憲君主制のもつ現代的意義の検討については若干別にしても、その政治・統治形態についての考え方は、当時の政治的社会的状況と密接に関連しているはずだからである。本稿の〔4〕で指摘しておいたが、「1818／19年講義」検討の意義としてあった特に（2）と（3）の問題は、本講義の内容的特徴の理解と直接・間接に関係するのである。というのも、本講義の終了間際の1819年3月にザント事件が発生し、この事件と相前後して多くのヘーゲルの弟子・友人知人たちにも関わるデマゴグ狩りが当局により開始され、そしてこの年の9月には言論・出版の自由を厳しく制限・抑圧することを中心にしたカールスバートの決議が連邦議会でなされる。

こうした状況を背景にして、ヘーゲルの当初の予定をはるかに超えて著作の刊行が遅延していく。このような時代背景、政治的社会的状況がヘーゲルの講義内容に変化を及ぼしていることが十分に予想される。

時期的にみて、ヘーゲルの講義内容に大きな影響をあたえそうなのが1818／19年講義の後になされた第3回講義（1819／20年）と、そしてその後刊行された1820年著作であるだろう。両者では、先に指摘したような1818／19年講義で重要な意味を有する立憲君主制はどのような内容を有し、国家論の中でどう位置づけられているだろうか。以上のことを考えると、1818／19年講義を検討した本稿は、第3回講義および1820年著作を一貫する重要問題を検討する予備作業にあたるといえる。

注

（1）この「講義録選集」は、<Felix Meiner Verlag, Hamburg 1983ff.>として、現在までに第10巻を除いてすべて刊行されている。

（2）全7回分の講義筆記録に関する詳細は以下の通りである。

講義年・学期・場所	聴講・筆記者	筆記ノート編者	ノート出版社・刊行年
①1817/18年・冬学期・ハイデルベルク大学	Wannenmann	Hegel-Archiv	Felix Meiner 1983
②1818/19年・冬学期・ベルリン大学	Homeyer	Ilting	Klett-Cotta 1983
③1819/20年・冬学期・ベルリン大学		Henrich	Suhrkamp 1983
④1821/22年・冬学期・ベルリン大学			
⑤1822/23年・冬学期・ベルリン大学	Hotho	Ilting	Frommann 1973/74 Holzboog
⑥1824/25年・冬学期・ベルリン大学	Griesheim		
⑦1831年・冬学期・ベルリン大学	Strauß		

- (3) 本文中に示した資料は、加藤尚武編『ヘーゲル哲学への新視角』（創文社、1999年）に収められた「資料 ヘーゲルの講義活動」、＜4. ハイデルベルク大学およびベルリン大学における講義一覧＞から抽出したものである。この資料は我が国でははじめて紹介されたものであり、大変貴重である。
- (4) *Briefe von und an Hegel*, hrsg. von J. Hoffmeister, Hamburg 1953, Bd. II, S.213.
- (5) 「1818/19年講義」のテキストとしては、次の二種類がある。①＜G. W. F. Hegel, *Die Philosophie des Rechts, Die Mitschriften Wannenmann (Heidelberg 1817/18) und Homeyer (Berlin 1818/19)*, hrsg. eingeleitet und erläutert von Karl-Heinz Ilting, Stuttgart 1983＞, ②＜G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über Naturrecht und Staatswissenschaft, Heidelberg 1817/18 mit Nachträgen aus der Vorlesung 1818/19, Nachgeschrieben von P. Wannenmann*, hrsg. von [den Mitarbeitern des Hegel Archivs] mit einer Einleitung von Otto Pöggeler, Hamburg 1983＞。本稿において、私は主に①を使用した。
- (6) *Ibid.*, S. 268-276.
- (7) 拙著『ヘーゲルに還る——市民社会から国家へ』（中公新書、1999年）の特に第三章「現実の理性的か」を参照。